

近世漁場の占有・利用と 自然生態との関わり

近世五島、天草の争論史料と絵図から

The Relationship between the Occupation and
Use of Early Modern Fishing Grounds and Ecology

橋村 修

はじめに

- ①上五島の魚目・有川の漁場争論
- ②福江島の大敷網の展開
- ③天草島の富岡浦漁場をめぐる争論
- ④漁場の占有、利用と生態との関わり—むすびにかえて—

【論文要旨】

本稿では、近世期における漁場の占有・利用と生態の関わりを解明することを目的としている。具体的には、①浦方制度下で漁村に設定された境界線で区画された地先漁場が、潮流や地形などの自然条件や魚類や海藻類の生態条件とどのように関わりながら利用されたのか、②ある村が占有する海面を、複数の村や農業集団や漁業集団が重層的に利用するメカニズムを検討した。対象地域は、個人の漁業権が残存した五島列島、浦方漁村主体の漁業権が展開した天草諸島である。分析結果と考察は次のようになる。①の課題に関して、五島列島上五島では、五島五浦の一つの魚目が有川湾全体の排他占有権を保持していたが、寛文期の富江藩の分知で海面に線がひかれ、権利を失った。しかし、藩境線をこえて魚は回游するので、その線は漁種によって、漁撈活動の意味を持たない面もあった。湾全体の排他占有権には、自然生態との関わりのあった可能性がある。天草諸島においては、近世初期に浦方制度の下で設定された地先漁場の境界線が、その後の漁業技術の進歩やそれを可能にした資本の蓄積により、漁撈活動に見合った境界線となる場合もあった。他方で、村の地先海面の占有が十分に展開していなかった五島列島福江島において、魚の回游経路の海面を必要とした18世紀後半のマグロ大敷網漁法の展開が、線で区切った地先海面の占有を可能にさせる場合もあった。近世漁村に付与された地先漁場の境界線は、政治、経済的要因や、漁法の展開、自然との関わりの要因が絡み合って、その性格が変化していくのである。②の課題である海面の重層的利用に関しては、タイ網を行なう漁業集団と採藻を行なう農業集団などの属性の違いで、同一対象とする海面における海洋資源への関わり方に違いを見た。その違いは、沿岸民の自然への多様な関わり方を示している。